

花傘山の造形とその変遷

——富山県の祭礼行事を中心として——

Design and Evolution of Hanagasayama:
Focusing on Festival Events in Toyama Prefecture

堀江 俊郎

キーワード：山・鉦・屋台, 笠鉦, 花傘, 造り物, 伝播

This study analyzes the transmission relationship between hanagasa and baskets. Using Hanagasayama from Toyama Prefecture as a case study, it aims to trace the evolution of their forms. While previous research on Hanagasayama from Toyama classifies them by shape and procession method, limited studies typify them according to the shape and decoration of the hanagasa.

Hanagasayama floats are featured in the following festivals held in Toyama Prefecture: Himi Gion, Fushiki Hikiyama, Shinminato Hikiyama, Ebie Hikiyama, Yokata Kodomo Hikiyama, Takaoka Mikurumayama, Daimon Hikiyama, Isurugi Hikiyama, and Fukuno Yotaka. Hanagasayama refers to a type of kasahoko float that features a shinbashira mounted on its base. A hoko-dome is attached to the top of a pillar, and a decorated hanagasa is suspended below it.

Research on the hanagasa attached to Hanagasayama floats identifies three types of artificial flowers: flat-shaped, hemispherical, and those with a hemispherical bulge at the center and a flat outer surface. An examina-

tion of the distribution of these shapes shows polarization into two main groups: the Takaoka-style characterized by flat flowers and the Hojozu-style characterized by hemispherical ones. Flat artificial flowers are found inland in Takaoka and Isurugi, whereas hemispherical artificial ones are found along the coast in Himi, Fushiki, Shinminato, Ebie, and Daimon.

Seven types of baskets are attached to the central pillar of the Hanagasayama in Toyama Prefecture. The most common type is an exposed basket, which represents the mainstream style in Takaoka, Shinminato, Daimon, Ebie, and Fushiki. This exposed basket is believed to be the original style. Subsequent stylistic diversification led to the development of unique baskets in Himi and Isurugi. Regarding basket shape, Takaoka, Daimon, and Fukuno tend to favor large spherical forms, whereas Shinminato and Ebie tend to favor square, cylindrical shapes.

The former is termed the Takaoka style, and the latter is considered the Hojozu style. The dichotomy between these styles concerns both flower umbrellas and baskets and stems from the competitive stance Hojozu adopted toward Takaoka. The Hojozu style deliberately avoids imitating the Takaoka style, a phenomenon that likely led to a stylistic evolution that gave rise to a more diverse range of forms.

目次

はじめに

I 花傘山の研究史

- 1 全国の笠鉾の研究史
- 2 富山県の花傘山の研究史

II 調査地域の概要

- 1 花傘山を持つ地域の範囲
- 2 花傘山の創建と地域の概要

Ⅲ 富山県の花傘山

- 1 高岡御車山祭
- 2 石動曳山祭
- 3 新湊曳山祭（放生津）
- 4 伏木曳山祭
- 5 海老江曳山祭
- 6 大門曳山祭
- 7 氷見祇園祭
- 8 福野夜高祭
- 9 小括

Ⅳ 花傘山の移り変わり

- 1 紙本着色高岡御車山祭礼行列絵図屏風にみる花傘山
- 2 古写真にみる花傘山
- 3 聞き書きと史料からみる花傘山の移り変わり

Ⅴ 考察

- 1 花傘の類型と分布
- 2 花傘の造形の広がりとその伝播関係からみた文化圏
- 3 籠の類型と分布
- 4 籠の造形の広がりとその伝播関係からみた文化圏

おわりに

謝辞

注

参考文献

はじめに

本研究では、富山県の花傘山を事例として、笠鉾の装飾である花傘・籠の伝播関係を分析し、造形の変遷を辿ることを目的とする。富山県の氷見祇園祭、伏木曳山祭、新湊曳山祭、海老江曳山祭、四方子供曳山祭、高岡御車山

祭、大門曳山祭、石動曳山祭、福野夜高祭では、花傘山が巡行する祭礼が行われている。花傘山とは、台車の中心に心柱を立て、心柱の先端には鉦留を取り付け、その鉦留の下に装飾した花傘を垂らした笠鉦である。その花傘山は囃子を演奏しながら町を巡行するものである。

従来、富山県の花傘山の研究では、形状や運行方法の特徴から分類が行われてきたがモノを精査して、花傘の部分の形状や装飾から類型化をする研究はまだ少ないといえる。類型化することによって富山県に存在している花傘山と呼ばれる笠鉦の文化圏を再考し、笠鉦の装飾はどのように伝播したのかを考察する。

I 花傘山の研究史

1 全国の笠鉦の研究史

この章では、笠鉦についての研究史を整理する。笠鉦とは何かという明確な議論は充分ではないが、植木行宣は笠鉦について以下のように述べている。

笠鉦の本質は依代である。だが、依り付くものは迎えて祀る神ではなく、災疫として発現するモノであった。モノとは、鎮めて遷却すべき神霊であって、笠鉦はそれを囃して送る風流拍子物¹⁾と一体の笠型の造り物であった。それは都市の発展と地域社会の成熟を背景に疫病防除の山鉦の祭りへ昇華し、一方で、郷村の成長を背景とする地域を挙げての行祭事へと受け継がれていった [植木 2017 : 201]。

笠鉦の変遷について植木は以下のように述べる。

笠鉦は大きく、〈風流傘にモノの扮装+囃し(中略)〉の形態から、〈笠鉦+仮装+囃し〉という仮装のパフォーマンスを競う有力者の大規模な風流拍子物へ展開し、仮装など特段の趣向を伴わぬ〈笠鉦+囃し〉という基本的な形態で広がっていった。近世になると、それらは練物の祭り

の主体として新たな山・鉾・屋台を生み出す母胎となり、また、風流踊となって全国に流布していったのである [植木 2017: 201]。

そして、植木は山・鉾・屋台としての笠鉾の流れを提示した。1つ目の流れは「出しが趣向を楽しむ造り物による造形物へ傾き、大型化するなかで成立した(中略)笠鉾型昇山と記してきた笠鉾」[植木 2017: 194]であり、2つ目の流れは「その一方でホコそのものが天空にそびえる形態へ展開する笠鉾もあった。『鉾(鉾車)への流れ」[植木 2017: 195]である。本研究では後者を扱う。

その後、笠鉾は近世都市祭礼の練物を舞台に盛行し、江戸型山車に代表される一本柱万灯型(笠鉾型曳山)が出しの載る笠から円筒状に幕をすっぽり掛けおろす形態を経て、幕が恒久的な屋形へ変化して真木がなくなるところで完成したが、それらに先んじて完成をみた笠鉾型曳山もあると述べている [植木 2017: 196-197]。

次に、山・鉾・屋台行事についての研究史をまとめる。はじめに折口信夫は以下のように述べた。

標山には、必松なり杉なり真木なりの、一本優れて高い木があつて、其が神の降臨の目標となる訣である。此を形式化したものが、大嘗会に用ゐられる訣で、一先づ天つ神を標山に招き寄せて、其標山のまゝを内裏の祭場まで御連れ申すのである。今日の方々の祭りに出るだんじり・だいがく・だし・ほこ・やまなどは、みな標山の系統の飾りもので、神輿とは意味を異にしてゐる [折口 1995: 234]。

一方、植木は「山鉾の祭りを構成する造形物のすべてを依代と説き、山車と一括してしまうのは大きな誤りである。その呪縛にとらわれている限り、都市文化としての山・鉾・屋台の祭りを解明することはできない」と言及している [植木 2016: 12]。また植木は「1本の串でも常盤木の枝でも十分とされるその依代が、どうして祇園祭では山や鉾という特有の形態をとるのか。

そうした基本的問題さえついに問われず、結果として山鉦の形態的変遷を解明し、都市文化としての意義を問うといった諸問題を封じ込めることになった」と指摘している〔植木 2016：11〕。笠鉦としての役目を果たしつつ装飾化されていく過程でどのような形状が広まったのかを考察した研究は、充分ではない。

本研究は、地域ごとの笠鉦を傘の部分の造形に絞り、実物を精査したのち類型化することや、古写真と聞き書きを用いることによってこれまであまり触れられてこなかった各地域の笠鉦の造形の広がりを探ることを目的とする。

今回取り扱うものは、傘を載せた笠鉦ではなく、放射状に造花を垂れさせたものである「花傘」を載せた笠鉦である。代表例としては、秩父祭の笠鉦・横須賀三熊野の練り・高岡御車山祭りの御車山などを挙げることができ、多様な形態の造花を付けた笠鉦が全国のいたるところに存在していることがわかる。

隣接した地域に形状が酷似した、造花を付けた笠鉦が分布し、大きな文化圏を築いている事例がいたるところに存在する。これらの事例については、その内部を細かく類型化しその造形の展開を探る必要がある。

2 富山県の花傘山の研究史

本研究は、富山県の花傘を付けた笠鉦を扱う。富山県では、造花を付けた笠鉦は「花傘山」・「曳山」といわれている。それは、台車の中央に心柱を立て、心柱の先端には鉦留を取り付けたものであり、その鉦留の下に装飾した花傘を垂らした笠鉦である。花傘山について植木は、一本柱万灯型に先じて完成をみた笠鉦型曳山に分類している〔植木 2017：197〕。

米原寛によると、富山県内の山・鉦・屋台行事のうち最も件数が多いものは高岡御車山に代表される『花傘山』であると述べている〔米原 2020：14〕。高岡を中心とした花傘山文化圏が形成されていることがわかる。

これまで、花傘山についての様々な分類がなされている。宇野通は、商業町と宿場町である高岡・大門・氷見・石動・福野を構造面では車輪の上に高欄を付けない点、巡行面では装飾重視で曳き回しが上品である点などから「高

岡型」と分類する一方で、新湊・伏木・海老江を構造面では車輪の上に高欄を付けるものであり、巡行面では曳き回し重視で威勢のよいことから「放生津型」と分類している [宇野 1997: 158-160]。

また、小境卓治は、高岡・石動では送り花を飾ること、夜間に巡行がないまたは夜間巡行がある場合は花傘に提灯を吊るすこと、巡行時の辻回しが上品なものとして「高岡型」とする一方で、放生津・海老江・伏木は送り花を飾らないこと、夜間には提灯台を設けること、巡行時には辻回しが勇壮であることから「放生津型」と分類した。そして氷見は提灯台を設けるが辻回しが上品であることから高岡型・放生津型の折衷型と位置づけた [小境 2001: 1-2]。小境はこの分類では大門の曳山について言及していない。

花傘山が2つ系統に分かれた理由について言及した先行研究が存在する。米原によると、安永の曳山騒動²⁾で放生津・城端・今石動で高岡に似た車輪が使用されたように高岡御車山は県内全ての「曳山」の雛形であった。江戸時代後期になると各地でそれぞれの曳山や運行方法が取り入れられていき、「高岡型花傘山」と新たな花傘山の雛形となった「放生津型花傘山」の文化圏が形成され現在まで引き継がれた。放生津が独自の花傘山を志向した背景には安永の曳山騒動で表出した高岡方への対抗意識があったとある [米原 2020: 25]。

これまでこのように分類されてきたが、本研究では傘の部分である花傘と籠に絞って物質文化的側面から分類を行いたい。この先行研究を踏まえ「つくり物」³⁾としての花傘の部分の造形や装飾を類型化することは、笠鉦の研究において価値の高いものであることが挙げられる。

花傘山に焦点を当てる理由としては、1つ目に近隣の地域に花傘をつけた笠鉦が多数存在し、比較研究が行うことができる事例であることが挙げられる。2つ目に花傘は竹を放射状に垂らしたものに和紙などで作成した造花を取り付けるものであるため壊れやすく消耗しやすい。そのため花傘の部分はつくり直しなどにより移り変わりが激しく、笠鉦を管理する人が幾度ものつくり替えによって現在までその造形を伝えてきたものであるため、造形的変化が起りやすく、様々な飾りが生まれてきた。しかし、装飾としての花傘と籠の形状の分類は未だに行われていないことが挙げられる。

Ⅱ 調査地域の概要

1 花傘山を持つ地域の範囲

富山県には、様々な山・鉾・屋台行事が行われている。その中で花傘を有する花傘山の祭礼を行っているのは以下の通りである。高岡市（高岡御車山祭、伏木曳山祭）、射水市（新湊曳山祭、海老江曳山祭、大門曳山祭）、氷見市（氷見祇園祭）、小矢部市（石動曳山祭）、南砺市（福野夜高祭）である。四方子供曳山は子供行事であるためここでは扱わない。花傘を付けた笠鉾は富山県の西側に集中して分布している。現在、富山市四方より東側では花傘山は存在しない。

2 花傘山の創建と地域の概要

花傘山の創建について米原によると、富山県での山・鉾・屋台行事の初出として知られるのは高岡御車山祭であり、1609年に加賀藩藩主前田利長が高岡町民へ御車山を与えたことが創始であることを伝えた書状が存在しているという [米原 2020 : 12]。高岡の歴史について定塚武敏は、城下町であったが、元和の一国一城令により高岡城は廃城となり、当初城下町として造られた高岡は急速にさびれ始めた。しかし、商工業都市への転換を図った結果高岡は加賀に次ぐ商工業都市として発展した歴史があると述べた [定塚 2000a : 3]。高岡御車山が創建されたのち、米原によると、17世紀中ばから18世紀にかけて放生津（新湊）・今石動（石動）・氷見・四方など、地域の拠点となる規模の大きな港町や商業町で祭礼が開始された。19世紀前半には伏木・海老江・福野、明治時代に入って大門などの周辺の町村に拡大したと述べている [米原 2020 : 14]。

Ⅲ 富山県の花傘山

富山県の花傘山の花傘は、鉾留の下に花傘台を取り付け、そこに造花の付

いた骨組を放射状に幾本も差し込み、垂れさせることによって傘状にしたものである。例外については後述するが基本的には赤、白、黄の造花が飾られる。その花傘台の下には竹細工のように細かく編まれた籠が心柱を通すようにして取り付けられることが多い。その他、鉾留の周りに立てて飾られるだし花が付けられる花傘山も存在する。

本章では、花傘に付けられる造花と籠を地域ごとに細かくみていくこととする。これらは、2024年の現状を記録し、それをもとに分析したものである。

1 高岡御車山祭

高岡御車山祭は、毎年5月1日に執り行われる。この日は、山町も含めた53か町より崇拝されている関野神社の春季祭礼の日である。7基の御車山巡行順は、通町を先頭とし、御馬出町、守山町、木舟町、小馬出町、一番街通、二番町となっている [定塚 2000b : 16]。6町は4輪なのに対して二番町のみ2輪である。巡行時の方向転換の際には、前輪を持ち上げて丁寧に行く。夜の巡行が行われることはない。

高岡御車山は曳山の構造的に欄干が低い位置にあるため、余裕を持って広々と花傘を垂らしている。曳山を全体でみた時に、地山から上山までの高さが低めであり、心柱が高く立っているため花傘が大きく目立つ。花傘は上山を囲むように大きく取り付けられている。御馬出町は他の町と比べてやや花傘の直径が大きめである。通町以外の花傘山には送り花と呼ばれる桜の木の枝に金銀の短冊が付けられた飾り物が後ろの高欄から垂らされる。

竹でできた花傘の骨組には、造花を固定するための針状の竹が付けられ、その針によって造花が固定される。造花は、和紙を円形に切り、その端に切込みを入れてヨリをかけたものを花びらに見立て、その和紙を何枚も重ねてつくったものである。それを針状の竹に差し込み、最後に円形の木製の留め具で造花を固定する。造花を貫く針は円形に切り抜かれた木製の留め具まで貫き、和紙でできた造花の部分を固定している。留め具には金や銀の正方形や円形の色紙が貼られる。このような平らな造花をここでは、「フラット型」と呼ぶ (図1)。造花の色は赤であれば全体的に赤色の単色である。単色の造花

をここでは、「単色」と呼ぶ。

だし花は、御馬出町・二番町・木舟町の曳山に取り付けられていて、1本の花傘に花傘と同じ形状の造花が3個取り付けられている。木舟町のみ、造花が立体的に作られている。花傘の装飾は、だし花を含む花傘の造花と造花の間に葉が付けられる。葉は、花傘の支えから垂直に立てるようにして取り付けられることが特徴である。



図1 フラット型の花傘
2024年5月筆者撮影

籠の形状は大形の球である。しかし、守山町はすこし角ばった形状である。どの町も籠はむき出しの竹細工がみえる状態であり、統一性がみられる。籠の中は透けてみえるような構造であり、布で覆われている柱がみえる。竹籠を透かして、心柱に刺繍された梅小鉢の印がみえる構造である。通町のみ例外で、布がなく金色に塗装されたものがむき出しになるという形状である。このようにむき出しの状態の籠をここでは、「むき出し型」と呼ぶ。

2 石動曳山祭

石動曳山祭は石動愛宕神社の祭礼であり、今町、柳町、紺屋町、上新田町、中新田町、下新田町、北上野町、下糸岡町、御坊町、博労町、南上野町の11

基の曳山が出される〔伊藤 1976：1-2〕。曳山の形状はやや小ぶりである。11基の曳山が方向転換の際には前輪を持ち上げて丁寧石動地区を巡行する。昼は花山として巡行するが、夜になると花傘と上山の軒に提灯を取り付けて巡行する。

石動の曳山は心柱がやや後ろに立てられている。花傘が上山の全体を囲むように取り付けられるのではなく、上山の後方に人形を囲む範囲で取り付けられている。花傘の大きさは、上山に対してやや小ぶりである。電線のない所では心柱を高くして花傘を高く上げるが、電線のあるところを巡行する際には上山の欄干にぶつからないように最低限まで花傘を下げる。花傘山には送り花とよばれる桜の木の枝が前方に立てて飾られる。

石動の曳山の花傘は、高岡御車山の花傘に酷似している。しかし、高岡御車山の造花は木製の円形状留め具によって造花を固定し、竹から出た針は留め具を貫いている。それに対して、石動の造花は留め具を貫くことはなく、立体的な留め具が針を包む形となる。全町が、和紙を円形に切り、その端に切込みを入れてヨリをかけたものを花びらに見立てたものを用意し、その和紙を何枚も重ねてつくったものであるため、「フラット型」で、造花は「単色」である。

だし花は2種類存在する。1つ目は、南上野町・北上野町に付けられる花傘と同じ形状の造花を用いるだし花である。2つ目は、下新田町・中新田町・御坊町に付けられる桜のような造花が無造作についているものである。花傘の装飾については、花傘の軒先には短冊のようなものが取り付けられている。この色紙は石動の曳山だけの特徴である。全ての町の造花と造花の間に葉が花傘の支えの竹から垂直に取り付けられている。

石動曳山祭では、竹で編んだ籠は確認できなかった。しかし、本来竹で編んだ籠が付けられている部分に布が円形に垂らされていた。籠の代わりに布を垂らしたものをここでは、「布型」と呼ぶ。

この布は全ての町についているわけではない。博労町・紺屋町・下糸岡町では布が確認できなかった。紺屋町には、布切れの位置に金色の筒が付けられていた。

3 新湊曳山祭（放生津）

新湊曳山祭は放生津八幡宮秋季例大祭のなかの神輿渡御に随行する形で行われる〔射水市教育委員会編 2020：118〕。

祭礼には、古新町、奈呉町、中町、南立町、立町、紺屋町、長徳寺、三日曾根、法土寺町、荒屋町、東町、四十物町、新町の13基の曳山が町を巡行する。方向転換の際には高岡などとは違い、車輪を引きずって方向転換が行われる。昼は花山として巡行を行うが、夜になると花傘が取り外され、提灯台を組み、提灯を取り付ける提灯山として巡行される。13基のうち12基は花傘山だが、中町の曳山のみ花傘が取り付けられない特異な構造である。

花傘は、上山を大きく囲むように大きく取り付けられている。東町、奈呉町などの鉾留が大きい町では電線の関係で花傘を長く下に垂らすことができないため、横に花傘をのばしている。曳山の巡行ルートが橋を通るため心柱に負担がかかる、柱の高さを調節できるという理由から鉄製の心柱にしている町も多い。

新湊の造花は花びらを半球状に広げることによって、ふわりと盛り上がった造花を付ける特徴がある。その造花のつくり方は様々で、①花びらとなる素材を何枚も重ねて蛇腹に折り込んで中心で縛って花びらを半球状に丸く広げてつくるもの、②花びらとなる素材を何枚も重ねて蛇腹に折り込まれたものを2つ用意し、それを十字に重ね合わせて中心を固定して、花びらとなる場所を半球状に広げてつくるもの、③木を円柱状に切ったものを上から円形に切りとられた花びらとなる素材を何枚も重ね、重ねていく素材の直径を徐々に大きくすることによってきれいな半球状の造花をつくる。その花びらの端には切込みを入れ、ヨリをかけずにつくるもの、④長円形の素材を何枚も重ねたものを2つ用意し、それを十字に重ね合わせて中心を固定して、花びらとなる場所を半球状に広げてつくるなど多様である。

これらの造花をここでは、「半球型」と呼ぶ（図2）。このように平らな花びらに見立てた和紙を差し込んで造花を作成する高岡・石動のフラット型の造花と違って、新湊の造花は花びらを半球状に広げることによって、ふわりとした造花を付ける。現在では、新湊の造花の素材は不織布が主流であり、



図2 半球型の花傘
2024年9月筆者撮影

ナイロン製と和紙製が混在している状態となる。

同じ半球型の造花でも、造花の色が単色のものである「単色」以外に、造花の内側と外側で色が違う2色によって彩られる造花が存在した。単色の町が9町、2色の町が南立町・新町・奈呉町の3町である。2色の造花をここでは、「二色」の造花と呼ぶ。だし花は全ての町でみることができた。

花傘の装飾は、造花と造花の間に立町以外の町は葉が付けられる。南立町・新町・立町・荒屋町・奈呉町・長徳寺・四十物町の造花の中心には、針金で蝶が付けられている。古新町・法土寺町・三日曾根・紺屋町・東町・長徳寺が造花の中心にキラキラと輝くモールを入れている。

新湊の籠の形状は多彩である。①縦長でやや円をえがいているが、ほぼ筒状の籠（古新町・奈呉町・三日曾根・新町・立町）、②縦長で丸く球である籠（長徳寺・四十物町・法土寺町・南立町）、③細長くほぼ筒状の籠（紺屋町・東町）、④大形の球である籠（荒屋町）の計4種類の形状の籠が存在する。

そして、高岡のように籠がむき出しであるむき出し型の町が6町ある。一方、籠が布で覆われている町が4基存在する。ここでは、「覆い型」と呼ぶ。

その他奈呉町では籠が2つあり、1つは他の花傘山同様に花傘の下につい

ているが、もう1つは花傘と標識の間に円柱状の籠が取り付けられている状態である。ここでは、「二つ型」と呼ぶ。二つ型であることに加え、花傘の上に籠がみられるのは新湊地区では奈呉町のみである。二つ型である奈呉町は花傘の下にある籠は普通のサイズであり、花傘の上にある籠はやや小さめである。

荒屋町では、一見むき出し型にみえるが、心柱に付けられた布をめくると丸く大きな籠の中に円柱状の細長い籠が入っている。この二重に籠がついている形状をここでは、「二重型」と呼ぶ。

4 伏木曳山祭

伏木曳山祭は伏木神社の春季祭礼であり、神輿、母衣武者行列、6基の曳山が出される〔松尾 1988: 6〕。昼は花傘を付けて巡行し、夜は花傘とカラクリ人形を除く人形が曳山から取り外され、提灯台が組まれた状態で巡行を行う。巡行時の方向転換では、ロープを引っ張り少しずつ引きずりながら曲がるのが特徴である。その他、「余興」・「かっちゃ」と呼ばれる曳山と曳山のぶつけ合いが行われることで有名である。

花傘は上山を大きく囲むように大きく取り付けられている。台車の部分と花傘の大きさのバランスは新湊と変わらない。心柱は余興の衝撃に耐えるため上町以外はすべて鉄製である。

花傘の造花は、半球状に盛り上がりをもせた半球型である。つくり方は、木を円柱状に切ったものに円形に切りとられた和紙を包むように何枚も重ね半球状の造花をつくる。花びらの端には切込みを入れ、ヨリをかけることによって花びらを綺麗にみせているものである。

造花の色は、黄色の造花は「単色」であり、それ以外では「二色」の造花である。素材は全町とも和紙である。だし花は本町以外のすべての町に付けられている。

花傘の装飾は、だし花を含む全ての花傘の造花と造花の間に葉が寝たように取り付けられ、造花の中心には蝶が付けられる。

籠は高岡よりは大きくないが、新湊でみられる筒状の形ではなく、やや横に膨らんでいる球状である。上町・本町の籠はむき出し型、次に中町・湊

町・寶路町は二重型である。中町の籠は内側の籠も含めてむき出し、湊町・寶路町に関しては丸い籠のなかにある細い籠が布で覆われている状態である。最後に石坂町の籠は、二つ型である。上に丸く大きな籠があり、下には細長い籠があってその細い籠が布で覆われている。二つ型である石坂町は、籠が2つ存在するといった点では新湊の奈呉町を思わせるが、伏木の石坂町はどちらも花傘の下に存在し、円柱状の籠は柱の下部に布に覆われて付けられている。

伏木では、同じ地域であるにも関わらず様々な形状をみることができる。柱には、石坂町以外は布で囲む。石坂町は、柱を全体的に籠で覆っている形状である。

5 海老江曳山祭

海老江曳山祭は、海老江加茂神社の秋季大祭であり、宵祭、例大祭、神輿渡御、曳山巡行、浜開獅子舞、成就祭で構成されている〔射水市教育委員会編 2014: 6〕。西町、中町、東町の3基の曳山が町を巡行する。巡行時の方向転換は引きずるようにして行方。巡行時に各場所で木遣り唄が唄われることが特徴である。

花傘は上山を大きく囲むように大きく取り付けられている。台車の部分と花傘の大きさのバランスは新湊と変わらない。造花は、半球状に盛り上がりをもせた半球型である。

つくり方は西町・東町と中町で異なっている。西町・東町は、木を円柱状に切ったものに円形に切りとられた和紙を包むように何枚も重ね半球状の造花をつくる。花びらの端には切込みを入れ、ヨリをかけることによって花びらを綺麗にみせているものである。一方、中町は、花びらの先端にヨリをかけずに切込みを入れた長円形の不織布を何枚も重ねたものを2つ用意し、それを十字に重ね合わせて中心を固定して、花びらとなる部分を半球状に広げてつくる。

西町・東町は、造花は黄と赤を交互に入れて作成しているものである。西町の人はこれをプチと呼ぶ一方、東町の人はマダラと呼ぶ。この混ざった色を本

論文では「混色」の造花と呼ぶ。その混色の造花は西町、東町の花傘の一段目に取り付けられる。混色以外の造花の色についてみていくと黄色の造花は「単色」であるが、それ以外は「二色」の造花である。だし花は全ての町に取り付けられている。

花傘の装飾として3基全ての造花と造花の間に葉が取り付けられ、1つ1つの造花の中心から蝶が付けられている。

籠は縦長でほぼ筒のような形状であり、四角状に見えるがほのかに丸みがついている。それらの籠は3基全てむき出し型である。

6 大門曳山祭

大門曳山祭は射水市大門、大門新、枇杷首地区で行われる大門神社・枇杷首神社秋季祭礼の曳山行事である〔射水市教育委員会編 2014：45〕。曳山は田町、中町、西町、枇杷首の4基である。

昼は花山として巡行し、夜は花傘と上山の軒に提灯を取り付ける提灯山が巡行する。巡行時の方向転換の仕方は前輪を持ち上げて丁寧に行う。この方向転換には名前があり、地元の人々はこれを「ヨッコ」と呼んでいる。

花傘は上山を大きく囲むように取り付けられている。台車の部分と花傘の大きさのバランスは新湊と変わらない。しかし、巡行時には、電線による高さ制限のため心柱を低めて花傘と上山の間が大幅に狭まることもある。

花傘の造花は、半球状に盛り上がりをもせた半球型である。つくり方は、木を円柱状に切ったものに円形に切りとられた和紙を包むように何枚も重ね半球状の造花をつくる。花びらの端には切込みを入れ、ヨリをかけることによって花びらを綺麗にみせているものである。造花の色は黄色の造花は「単色」であるがそれ以外はすべて「二色」の造花である。だし花は枇杷首以外の曳山全てに付けられている。花傘の装飾は、全町の花傘の造花と造花の間に葉が取り付けられ、造花の中心には蝶が付けられる。

大門の籠の形は様々である。田町では大形の球である。中町は大形の縦長の楕円であり、新湊などでみられる筒状のような形状ではなく球である。西町は籠自体が存在しない。枇杷首はやや小さく横に潰れた楕円であるが、現

在のものは新湊の新町から譲り受けたもので、もともとは大形の球である。

西町以外の3基はむき出し型である。西町は「覆い型」のようにみえるが、柱の布で膨らみを作っているだけで実際には籠が入っていないため、ここでは、「無型」と呼ぶ。

7 氷見祇園祭

氷見祇園祭は御座町日吉神社と中町日宮神社の、各々相殿に鎮座する八坂神社の例大祭であり、南は日吉神社の氏子十町、北は日宮神社の氏子六町によって行われる。南北両町とも神輿には太鼓台が供奉し、上伊勢町、南上町、南中町、御座町、地蔵町の5基の曳山が町内を中心に巡行する [小境 1996 : 22]。

氷見祇園祭は花傘の形状が町によって異なっている。南上町は、上山を大きく囲むように大きく取り付けられている。台車の部分と花傘の大きさのバランスは新湊と変わらない。上伊勢町は、上山を大きく囲むように取り付けられている。花傘の直径はやや大きめである。地蔵町は、新湊などよりもひと周り大きかったが、現在は、とても小さくなった。

造花は全て盛り上がりのみせた半球型の造花である。つくり方は花びらにみえるように和紙をカットしてヨリをかけていない和紙を何回も蛇腹に折り込み、中心を針金で絞りを、それを半球状に広げるものである。素材は南上町・地蔵町は和紙であるが、上伊勢町は市販の折り紙を使用する。南上町・地蔵町が「二色」であるのに対して上伊勢町は上伊勢町の造花はやや小さめに作られた形状で「単色」である。そのためか、上伊勢町の造花は9個付いているが、花傘が特別大きい形状ではない。地蔵町の造花は、「二色」であるが、造花の中心の色の面積が大きい。

だし花は南上町のみ存在する。花傘の装飾は南上町の葉のみである。

次に籠という点でみていくと、南上町・地蔵町・上伊勢町は存在していない。南中町は昭和になって再建されて今の曳山に至っている。現在は半球状の籠がみられる。その籠は竹で編まれた竹籠である。半球状の籠であり、ザルをひっくり返したような形である。ここでは、「ザル型」と呼ぶ。

御座町の曳山では、現在は付けられていないが昔は花傘台と籠が取り付け

られていたという。その籠と花傘台は電線の関係で、曳山を低くするために現在は取り除いているものの御座町の山倉に現在も保管されている。その御座町の籠も半球状であり、籠を赤い布で覆っている。

8 福野夜高祭

福野夜高祭として知られているものは、5月1日、2日に行われる福野神社春季祭礼の宵祭りの部分であり、本祭りは3日に行われる曳山祭である〔藤本 2018 : 44〕。

本祭りでは、新町、横町、浦町・辰巳町による3基の花傘山と、船の形状であり花傘をもたない上町・七津屋の計4基の曳山が巡行する。巡行時の方向転換にはジャッキで持ち上げて丁寧に行う。日中のみの巡行である。

曳山と花傘の大きさのバランスは石動の曳山に似ていて、心柱がやや後ろに立てられている。花傘は、心柱がやや後ろに立てられるのも理由だが、上山の全体を囲むように花傘が取り付けられるのではなく、上山の後方に人形を囲む範囲で取り付けられている。花傘の大きさは、上山に対してやや小ぶりである。他の地域と比べて花傘の色の組み合わせが特殊なものであり、多色な花傘である印象が強い。

造花は、和紙で作成されている。造花の外側はフラット型であるが、内側は丸みを帯びた半球状である。それをここでは、「折衷型」と呼ぶ。造花のつくり方は竹でできた針の先に円形の部品を取り付けてその上に補強材となる画用紙で花びらの根本を固定する。造花の中心となる花びらの部分の和紙に切込みを入れた上でヨリをかけて平面状に貼り付け、中心部は立体的にするために立たせるようにして取り付ける。造花の色は「二色」である。

しかし、例外も存在する。横町の花傘の1番上の造花は半球型の「単色」の造花であり、花傘の内側に付けられる造花は折衷型の造花だが、外側の和紙に切込みを入れない形状である。

福野の曳山では、この地区でしかみることができない薄紅、緑、青色の造花が存在する。

だし花はどの町も存在しない。花傘の装飾は造花と造花の間に存在する葉

のみである。葉は全ての町に付けられている。新町以外は、花傘に垂直ではなく、寝たように葉が付けられている。

籠の形状について、新町、横町は横に潰れた楕円形である。しかし、浦町・辰巳町の籠はやや丸気味である。それらは新湊などでみられる筒状の籠ではない。その籠は覆い型であり、赤い布で覆われている。

9 小括

高岡・石動・新湊・伏木・海老江・大門・氷見・福野の8つの祭礼の花傘と籠をまとめると以下の通りである。

造花については3種類に分けることができる。1つ目は、平らな形状の「フラット型」である。これは、高岡・石動が該当する。2つ目は、半球状に盛り上がりみをさせた「半球型」である。これは、新湊・伏木・海老江・大門・氷見・福野⁴⁾が該当する。3つ目は外側が平らで内側が半球状に盛り上がりみをみせている「折衷型」である。これは福野のみ該当する。

籠については、大きくむき出し型、覆い型、布型、二重型、二つ型、ザル型に分類される。高岡はむき出し型、石動は布型・無型、新湊はむき出し型・覆い型・二重型・二つ型、伏木はむき出し型・二重型・二つ型、海老江はむき出し型、大門はむき出し型・無型、氷見はザル型・無型、福野は覆い型である。これらの籠の分類の中で最も数が多かった型はむき出し型の籠である。

IV 花傘山の移り変わり

本章では、花傘山の移り変わりを絵図・古写真・聞き取りから読み解き、分析したことを記述する。第1節では、高岡御車山祭の絵図から江戸時代後期の曳山の様子を読み解く。第2節では、高岡・新湊・伏木・海老江・大門の祭礼を古い写真を用いて大正から現在までの変化を読み解く。第3節は、花傘はどのような変遷があったのかを聞き書きを用いて判明したことを記述したものである。

1 紙本着色高岡御車山祭礼行列絵図屏風にみる花傘山

文化遺産オンラインによると、この絵図は江戸時代後期のものであると考えられ、高岡御車山祭の行列を描いた最古の絵画史料である。ただし、文字の記載は一切なく、年代・作者は不明である（図3）⁵⁾。

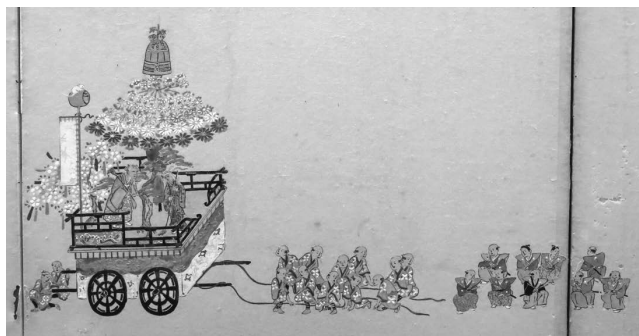


図3 紙本着色高岡御車山祭礼行列絵巻屏風
高岡市立博物館より提供

高岡市立博物館に提供して頂いた絵図のデータをもとに花傘のつくり、籠、送り花について記述する。ただ、籠は花傘に隠れて描かれていないため籠は記載しない。

通町の造花は赤と白のみである。それは、色を通常の横のラインで1色に揃えるのではなく、赤一色の1本の花傘と白一色の1本の花傘を交互に刺している。赤の造花は単色のふんわりとした半球型を思わせるような形状である。白の造花は内側が赤色であり平らな造花である。それらの赤と白の造花は縦列に飾られる。一方、通町以外の御馬出町・守山町・木舟町・小馬出町・一番街通・二番町・坂下町⁶⁾では全ての造花が平らな形状のものであり、共通して現在では存在していない薄紅色の花びらが存在していた。造花の色は町によってバラバラであったように見える。御馬出町は「混色」・「二色」・「単色」、守山町は「二色」・「単色」、木舟町は「混色」・「単色」、小馬出町は「混色」・「二色」・「単色」、一番街通は「混色」・「二色」・「単色」、二番町は「混色」・「二色」・「単色」、坂下町は「混色」・「二色」・「単色」である。

このことから、江戸時代後期の高岡御車山は各町でそれぞれ違う色や形の造花で町ごとに花傘に個性を出していたことが分かった。しかし現在の高岡御車山では、様々な色の造花をみることができず、6基に統一性がみられた。だし花についても形状が町によって異なっていたが、造花の形状は統一され、だし花に個性があるのは木舟町のみである。

2 古写真にみる花傘山

高岡・新湊・伏木・海老江・大門・氷見の花傘の造形について古写真から読み取れることを記載する。

高岡御車山は、1910年から1916年頃に印刷された古写真が残っている。文化遺産オンラインに掲載されている「絵葉書『高岡御車山』」⁷⁾から分析すると、通町では、造花が現在よりやや大きめに作成されている。造花の色も通町のみ色の組み合わせが違うようにみえる。現在の御馬出町の曳山は、花傘の直径が大きく、花傘を横に大きく広げていたが、この古写真ではあまり横に広がっていない状態である。この2点以外は現在まで形状が継承されている。

新湊は、調査報告書に1918年の色彩絵葉書が掲載されている。しかし、この絵葉書には、三日曾根の曳山の写真は残っていない。その古写真からは造花の色を確認することができないが、だし花は1つの枝に造花が1つだけ付けられていることが現在と違う点であり、大正年間から変化があまりみられないようにみえる〔射水市教育委員会編 2020〕⁸⁾。

伏木では、湊町の公民館に1948年の古写真が残されていた。モノクロの写真であるため造花の色を確認することはできないが、写真の造花の濃淡から造花の色の組み合わせが現在と異なる町が存在していたことが確認できた。上町では、現在は造花の色は横一列に同じ色を指すが、1948年では、縦に造花の色を交互に変えていて、横にも造花の色を変化させている。本町では白色の造花を確認することができないが、全て同じ色の造花を付けていた可能性がある。このように現在の伏木曳山祭の花傘は、色や造花の形状が固定化されて、全町で統一されているが、1948年の伏木曳山祭の花傘では、造花を町ごとに異なる色にしていたことが分かる。

海老江では、射水市教育委員会の調査報告書に中町・西町の大正時代の古写真と東町の1940年の古写真が掲載されている。その古写真によると全町花傘が現在よりやや下に垂れ気味である。西町では、花傘の造花の色が現在と異なっている⁹⁾。現在では、赤と黄を混ぜたもの、赤・黄・赤・白・赤であるが、古写真では、黄色の造花が確認できない。その他、現在の西町ではだし花がついているが、古写真ではだし花を確認することができない。中町では古写真の造花の色の濃さからすべて赤色であった可能性がある。だし花はついているが、1本のだし花に1つだけ造花が付いている。東町では、この古写真のみ昭和であるが、現在とあまり変化がない。変化しているのはだし花のみであり、1本のだし花に1つの造花が付いている。新湊市教育委員会が出版している『新湊の曳山』を確認すると中町、東町は、籠が取り付けられていない時期が存在していることが確認できた〔新湊市教育委員会編 1981：112、116、118〕。

大門では、射水市教育委員会が出している調査報告書に昭和初期の田町・1941年の中町・1940年の西町・1967年の枇杷首の写真が記載されている。これらからわかることは、全町の花傘が高くあげられていることである。現在は、花傘の位置が下がったくらいで、花傘の造花については変化がみられない。だし花では、田町のみ昔の方がだし花の数が多いことがわかる〔射水市教育委員会編 2014〕¹⁰⁾。なお、石動・氷見・福野の古写真は現段階で確認できなかった。

3 聞き書きと史料からみる花傘山の移り変わり

第3節では、聞き書きによって判明した主に昭和から現在までの変遷を記載する。

新湊は、昔は全て和紙であったが、現在ではナイロンや不織布などの様々な素材で造花が作成されている。新湊市教育委員会によると、1975年頃に和紙からナイロン花に変更されたとある〔新湊市教育委員会編 1981：47〕。その理由は耐久面で雨に強いことと造花に付けた塗料が雨によって溶け落ちて曳山の上の部分が赤く染まって苦労したことが始まりである。最初にナイロ

ンで作成したのは、紺屋町である。紺屋町から広がってビニールが主流となり、広がりを見せた。ビニールに変えたのちに造花を赤く染める染料に毒性が発見されたため染料が変更されるということもあった。しかし、その後も造花の着色料を変更してビニールの造花がついた花傘を付けていた。

現在は、古新町が不織布の造花を開発して、そのつくり方のマニュアルや作成方法が広まり不織布が主流となった。そのように、新湊の曳山の造花は利便性と造花の見た目を求めて現在のものとなったのである。花傘の支えも竹ではなく塩化ビニールになっている町も存在する。

その他、戦前には全て赤色の造花を付けた花傘が何基か存在していた。奈良町の花傘の造花がすべて赤色であるのは、その名残りである可能性がある。伏木旧中町曳山保存会によると「旧中町の曳山の傘花は、曳山創建以来、昭和三十三年までは『紅』一色であった。口に紅を含み、霧吹きのように和紙を色付けしていた。(中略)昭和三十四年からは『赤』『白』『黄』の三色と成っている。昭和三十四年以降は傘花の製作を放生津(金谷商店)に製作依頼している」とある[資料編纂委員会編 2021:104]。このことから伏木でも昔は赤一色であったことがわかる。

この記述からは、旧中町が赤以外の白、黄が付いたのは新湊に依頼してからであることが分かる。その他新湊に花傘を発注していた事例が存在する。射水市教育委員会によると海老江西町は「平成元年頃までは新湊の紙屋に発注していた」[射水市教育委員会編 2014:18]とあり、大門では「造花はもともと新湊や高岡市福岡町の職人に発注していた」[射水市教育委員会編 2015:56]とある。このことから伏木、海老江、大門の花傘の製作には新湊の業者が関与していたことがわかる。氷見に新湊の業者が関与していたかどうかは現段階では判明していない。

V 考察

1 花傘の類型と分布

第3章では、花傘についている造花の形状には、①フラット型・②半球

型・③折衷型が存在し、3つに分類できることが分かった。その分類を分布図で示すと、以下の通りである（図4）。フラット型の地域は丸、半球型の地域は四角、折衷型の地域は三角で示した。

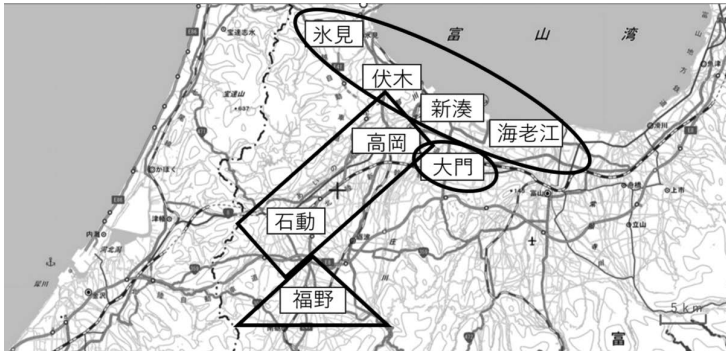


図4 造花の分布図
国土地理院地図を加工して筆者作図

この図をみると、フラット型の造花をもつ祭礼は内陸部の地域で行われる。一方で、半球型の造花をもつ地域は海沿いに広まる。そのなかで折衷型は離れて内陸部に分布していることがわかる。

これらの①フラット型、②半球型、③折衷型の3種類の造花の特徴をまとめると、フラット型の造花をもつ高岡・石動は、色を組み合わせるといふことはせず、造花の中心部に金銀の留め具を付けるのみで「単色」しか存在しない。フラット型は中心部に花びらは存在しないため必然的に「単色」しか形成されないという理由が考えられる。

装飾についても、造花と造花の間に葉を付け、石動では花傘の軒下に短冊を掛けるのみであり、高岡では、造花の中央に金や銀の紙を貼り、石動では金や銀の留め具によって装飾されているが、多種多様な造花が存在しているようにみえない。

次に、②半球型の造花をもつ新湊・海老江・大門・氷見・福野の横町では「単色」・「二色」・「混色」など3種類の造花の色が存在する。造形について細

かく検討すると花びらの先にヨリをかける大門・伏木に対して、氷見・海老江・新湊ではヨリをかけない。ヨリをかけない新湊・海老江・氷見では高岡から離れているが、ヨリをかける伏木・大門では高岡に近い位置に分布している。そのことから大門・伏木は半球型でもフラット型の形状の特徴ともいえるヨリがかかっていることが分かる。

装飾についても造花と造花の間に葉を付ける。その他大門、新湊、海老江、伏木では蝶を造花に付けている。新湊では蝶が見つからない町は煌めいたモールを付けるなど多種多様な造花が存在していることが分かる。

最後に、③折衷型の造花をもつ福野では、横町が付けている半球型の造花を除くと全て「二色」であり、全ての町に葉が付けられる。このことから多種多様な造花が存在しているわけではない。

2 花傘の造形の広がりとその伝播関係からみた文化圏

第1節では、大きく2つのグループに分けるとフラット型の高岡・石動グループと半球型の氷見・伏木・新湊・大門・海老江に分けることができ、フラット型の造花はシンプルな形状であり、様々な造花の装飾が存在していないことに対して、一方半球型の造花はふっくらしている形状であり、造花を煌びやかにさせるための様々な装飾が施されていることが分かった。

このことからフラット型の文化圏の造花と装飾はシンプルであり、花傘全体を「上品」にみせているのではないかと考察する。フラットな造花にすることによって、造花のヨリをかけた部分を繊細にみせて上品に仕上げている。一方、半球型の文化圏では上品な花傘を作成する方向性ではなく、花を膨らませて煌びやかにみせるための装飾を付けることによって「豪華」にしていた。その結果、各地域に多岐にわたる造花が展開していったと考察できる。

第1章に先行研究である宇野と小境の分類を記したが、宇野は「高岡型」とする高岡・大門・氷見・石動・福野を曳き回しが上品とする一方で、「放生津型」である放生津・伏木・海老江を曳き回し重視で「威勢がよい」としている [宇野 1997: 158-160]。また、小境は「高岡型」とする高岡・石動を迂回しが「上品」とする一方で、「放生津型」とする放生津・海老江・伏木を迂

回しが「勇壮」としている。そして「折衷型」とする氷見は辻回しが上品としている [小境 2001 : 1-2]。

この先行研究の分類と、フラット型の造花をもつ高岡・石動と半球型の造花をもつ新湊・伏木・海老江・大門・氷見の分類とは重なることが多い。このことからフラット型の造花は「高岡型」であり、半球型の造花は「放生津型」の文化圏であることがわかる。このように考察すると、先行研究の分類と花傘の造花で分ける分類が一致しない地域として大門・氷見が存在する。大門は辻回しは上品であるが、祭礼時には片方の車輪を持ち上げて幾度も回転するパフォーマンスが行われるという点では「勇壮」な祭りともいえる。

氷見は現在の巡行方法から「高岡型」であるとされているが、米原によると、「かつては曳山同士のぶつけ合いや、その際に演奏された〈喧嘩山〉という囃子もあり、威勢が良く賑やかな巡行であった」とある。このことから昔は完全な「放生津型」であったことがわかる [米原 2020 : 21]。

このように祭りの静の雰囲気とあうシンプルにして上品に造花をみせようとするフラット型の文化圏である「高岡型」と、祭りの動の雰囲気にあう造花に装飾を施すことによって豪華にみせようとする半球型の文化圏である「放生津型」がうまれたのだろう。2つの文化圏に二極化した背景には、放生津型が高岡の花傘山に対する対抗心があったのではないか。そこには、第1章で記述した安永の曳山騒動が絡んでいる可能性がある。

同じ半球型の文化圏であっても、新湊、海老江、氷見では独自の造形を築いている。新湊は、富山県の花傘山のなかで最もバリエーションが豊富である。それは、現在に至るまで花傘を管理していく過程で利便性と煌びやかな花傘を追求したことが要因と考えられる。海老江では独自の「混色」の造花をもつ。氷見では、花傘すら付けない町、小さい花を多数付ける町、小さな花傘を付ける町などの独自の花傘を付けるようになっていった。

第4章に花傘の職人の話ががあったが、大門・海老江の花傘をつくる職人が新湊に存在していたこともこの文化圏を形成した理由に影響を与えているのであろう。

半球型の文化圏をもつところは、多様な造花が存在している傾向がある一

方で、フラット型は造花にあまり個性を出さない傾向があることが分かる。しかし、第4章での紙本着色高岡御車山祭礼行列絵図屏風から江戸後期とされる高岡御車山の造花が多様であったにも関わらず、現在では形式化された造花が存在していることが分かった。

ただ福野の花傘山の巡行を一時中断していたようであるが、昔から独自の形状を築いてきたと考えられる。

本研究では深く伝播関係や、装飾化されてきた笠鉾の変遷については古写真や聞き書きによって追える時代範囲のみしかカバーすることはできなかったが、現在の花傘山の装飾の分布と文化圏を類型化することができた。

3 籠の類型と分布

第3章では籠の種類としてむき出し型・覆い型・二重型・ザル型・二つ型などを挙げてきた。それを踏まえたうえで分布図をつくと以下ようになる(図5)。

高岡・伏木・新湊・海老江・大門の地区にむき出し型をみることができる。

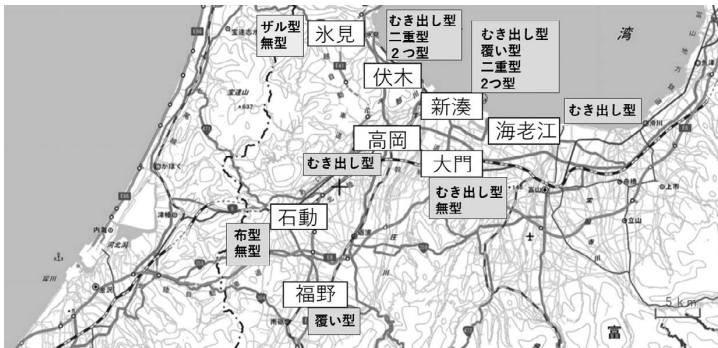


図5 籠の分布図
国土地理院地図を加工して作図

それらは、氷見を除く海沿いから高岡までの内陸部の範囲にわたって分布している。そのなかで新湊では、むき出し型・覆い型・二重型・二つ型であり、伏木では、むき出し型・二重型・二つ型と多彩な籠が存在している。

氷見・石動・福野は、むき出し型の籠を付けることはなく、氷見はザル型、石動は籠すら付けない布型、福野は覆い型の籠を付けている。福野以外はその地区独自の籠の付け方を築いている。

籠が無い石動、ザル型である氷見を除いて、むき出し型・覆い型・二重型・二つ型の籠の形状を細かく見ていくと高岡は大形の球である。新湊は多彩な籠が存在しているが荒屋町を除くと高岡ほど大形ではなく縦長の筒状の籠または縦長の球であることが分かる。伏木では高岡ほど大きくない球。海老江は縦長の筒状である。大門では大形の球¹¹⁾ または大形の縦長の球である。福野は横に潰れた大形のやや楕円であった。籠の形状についても2つの文化圏に分けることができる。大形の球の籠を付ける高岡・大門・福野は「高岡型」の形状と分類することができる。その「高岡型」は内陸部に分布していることが分かる。その一方で大形ではなく縦長の楕円や筒状の籠を付ける新湊・海老江は「放生津型」の形状と分類できる。その「放生津型」は海沿いに分布していることがわかる。しかし、籠をつくる職人が限られてきていることを理由に、籠の形状が他地域と混ざってきている可能性がある。

4 籠の造形の広がりとその伝播関係からみた文化圏

分布図をみると、むき出し型の籠が存在する地域が高岡・伏木・新湊・海老江・大門である。これらは富山県西部の海沿いから内陸部にかけて集まっていることがわかる。

そのむき出し型の籠をもつ花傘山の数を地域ごとに書き出すと高岡は、7基のうち7基がむき出し型である。新湊は、覆い型からむき出し型へ、むき出し型から覆い型へと町の人々の考えによって変更することがよくあるが、むき出し型は現在6基である。二重型の籠自体はむき出されたむき出しの形状であり、布をめくらなければほぼむき出し型に見えるため二重型の籠をむき出し型であるとみなした場合、12基のうち7基の曳山がむき出し型である。伏木は7基のうちむき出し型であるのは2基である。二重型と二つ型の籠自体は新湊と同様にむき出された形状であり、それらをむき出し型とカウントすると7基のうち7基すべてがむき出し型となる。海老江では3基のうち3

基すべてがむき出し型である。大門では、無型である西町以外はむき出し型なので、4基のうち3基がむき出し型である。

以上のことから、この高岡、伏木、新湊、海老江、大門のむき出し型が存在する地区ではむき出し型の花傘山が数多くを占めていることがわかる。高岡御車山の形状である、むき出し型を基準として伝播していったため、むき出し型が存在する地区ではむき出し型が数多くを占め、そのむき出し型の籠を付ける文化圏が形成され、そのなかで各地域はむき出し型からの発展系として二重型・覆い型・二つ型の籠がむき出しの文化圏の中で形成されていた。そして福野、氷見、石動ではむき出し型の籠を付けずに、発展系である布型・ザル型・覆い型・無型の籠を付けている。

次に籠の形から伝播関係を考察すると、まず「高岡型」の籠の形状をもつ高岡・大門・福野と分類があるように大門・福野は高岡の籠の形状が伝播したものである。しかし、大門では、新湊の籠を貰ってきた枇杷首の事例から新湊の影響が最近になって出てきていることがわかる。次に「放生津型」の籠の形状を持つ新湊・海老江は、高岡の籠とは違うオリジナルの形状の籠を築いた文化圏であり、籠の形状が酷似していることから新湊と海老江で伝播関係があったと考えられる。そのなかで伏木では大形ではない球状の籠を付けているため「高岡型」と「放生津型」の形状の折衷型として今に至ったようにみえる。

おわりに

富山県の花傘山は、これまで巡行方法や花傘山の躯体によって「高岡型」と「放生津型」に分類されてきた。しかし、花傘という飾り物を細かくみるのが看過されてきたため、花傘と籠に焦点を絞って類型化を行った。その結果、花傘の飾り物だけでみても、つくり方と装飾、そして籠の形状から「高岡型」と「放生津型」に分類できることが分かった。

花傘については、内陸部にシンプルな平らな形状をした造花を飾る「高岡型」の文化圏を形成する一方で、海沿いには豪華な多種多様な半球状の造花

を飾る「放生津型」の文化圏を形成しているような形で分布している。花傘の造形からみる「高岡型」と「放生津型」の二極化は、安永の曳山騒動の後に表出した対抗意識が、花傘山の躯体に加えて花傘という飾りものにも形として表れたものである。そのため、祭礼の雰囲気からフラット型の造花を優雅に上品にみせる「高岡型」の文化圏に対して、激しい祭礼の雰囲気に合わせて半球型の造花を豪華にみせる「放生津型」の文化圏が形成された。

「高岡型」では花傘の造形が変化して広まっていった様子がみられなかったが、「紙本着色高岡御車山祭礼行列絵図屏風」をみると、少なくとも江戸後期の高岡では多種多様な花傘が存在していた。一方で「放生津型」では様々な色の付け方や装飾の造花が存在していることが分かった。

籠については、むき出し型、覆い型、布型、二重型、二つ型、ザル型の6種類の籠が存在している。そのなかでもむき出し型は高岡、伏木、新湊、海老江、大門でみることができ、むき出し型の文化圏が存在していることがわかる。その周りにむき出し型ではない氷見、石動、福野が分布する形となる。むき出し型は標準のものであり、そのむき出し型の発展系としてその他の籠が広まっていった。

籠の形からは「高岡型」と「放生津型」に分類することができ、大門・福野は高岡の系統を組んで内陸部に分布し、海老江は新湊の系統を組んで海沿いに分布する。伏木は両方の系統を取ったものといえる。

このように、花傘と籠の分類と変容について細かくみてきたが、花傘と籠は対抗意識から2つの文化圏に二極化していることが分かった。花傘と籠の文化圏は一致することはなかったが、類型化し文化圏をまとめることができた。

花傘の職人がどのような変遷を辿って現在に至ったのか。また、古写真を収集したのちに分析することが今後必要となるためその分野に関しては今後の課題としたい。

謝辞

調査に協力して頂いた祭礼関係者の皆様と絵画資料の画像提供して頂いた高岡市立博物館の皆様に改めて御礼申し上げます。

注

- 1) 風流拍子物は中世の半ばころから後期にかけて正月や盆の祭事を賑わした集団歌舞である。その風流拍子物は神霊の送迎、なかでも疫病等の災厄をもたらす神霊を囃して鎮め送る機能を本質とし、その神霊を依らせる造り物や囃すものの装いに「風流」を表し、それを特色とするものであった〔植木 2016 : 29〕。
- 2) 安永の曳山騒動は、1773年に新湊中町の車輪を高岡の大王に修理に出した際にこの曳山の車輪をみた高岡の人々は高岡御車山とよく似た形であることを問題として放生津（新湊）・城端（南砺市）・今石動（小矢部市石動）に曳山の巡行を差し止めるように加賀藩に訴えたことが始まりである。最終的には1776年に加賀藩が放生津・城端・今石動に高岡とよく似た形である「指車（大八車）」・「板車」の使用を禁止し、地車（土車）の使用に限ることを通達した騒動である〔射水市教育委員会 2021 : 12-13〕。
- 3) 日高薫は「『つくり物』とは、儀礼・祭礼の際に、飾りもの・見せものとする目的で造られる人工的な造形物をさす。種々の人形や物を趣向をこらして配置した州浜や、山車・山鉦などの上に飾られる山に見立てたつくり山、造花、つくり枝など、『風流（ふりゅう）』の語で表される飾りものから、能の道具立てである舟・山・宮・釣鐘などの舞台装置など、古代から現代に至るまで、階層を問わず多彩な展開がみられる」と定義している〔日高 2004 : 1〕。
- 4) 基本はすべて折衷型であるが、横町の花傘の最上段のみ単色の半球型であるため、一部存在することから福野をここに明記した。
- 5) 文化遺産オンライン『紙本着色高岡御車山祭礼行列絵図屏風』
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/593502>（最終閲覧日：2025年11月20日閲覧）による。
- 6) 坂下町は現存していない花傘山であり、この絵図によってはじめて坂下町の形状が明らかとなった。
- 7) 文化遺産オンライン「絵葉書『高岡御車山』」
<https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/580202>（2025年11月20日閲覧）による。
- 8) 口絵 26～38
- 9) 資料編図版 1、2
- 10) 資料編図版 3、4
- 11) 枇杷首の籠は横長の球であったが、昔は大形の球であったという証言に基づいて、大形の球と縦長の球とする。

参考文献

伊藤曙覧

1976「石動の曳山」富山県教育委員会編『富山県の曳山』富山県郷土史会

射水市教育委員会編

2014『海老江加茂神社秋季祭礼の曳山行事 大門神社・枇杷首神社秋季祭礼の曳山行事
調査報告書』射水市教育委員会

2020『放生津八幡宮祭 曳山行事・築山行事総合調査報告書』射水市教育委員会
射水市新湊博物館編

2021『国重要無形民俗文化財指定記念特別展放生津の祭—海がはぐくむ曳山・築山—』射水市新
湊博物館

植木行宣

2016『山鉦の祭り—その成立と発展—』植木行宣・福原敏男『山・鉦・屋台行事 祭りを飾る民
俗造形』岩田書院

2017『笠鉦とその流れ—山・鉦・屋台の祭り研究拾遺 I—』京都民俗学会編『京都民俗：京都民
俗学会誌』35 京都民俗学会

宇野通

1997『加越能の曳山祭』能登印刷出版部

折口信夫

1995 (1915)『盆踊りと祭屋台と』折口信夫全集刊会編『折口信夫全集 2』中央公論社

小境卓治

1996『祇園祭り』氷見市立博物館編『氷見の祭りと年中行事』氷見市立博物館

2001『越中の曳山と氷見の曳山』小境卓治

定塚武敏

2000a『高岡の歴史』高岡市教育委員会編『高岡御車山祭 華やかな神の座』高岡市教育委員会

2000b『御車山祭の行事』高岡市教育委員会編『高岡御車山祭 華やかな神の座』高岡市教育委
員会

資料編纂委員会編

2021『旧中町曳山想起』伏木旧中町曳山保存会

新湊市教育委員会編

1981『新湊の曳山』新湊市教育委員会

日高薫

2004『共同研究の経緯と概要』日高薫編『国立歴史民俗博物館研究報告』114 国立歴史民俗博物館

藤本武

2018『福野夜高祭—神を迎える壮麗な行燈』阿南透・藤本武『富山の祭り—町・人・季節輝く』
桂書房

松尾かおる

1988『伏木曳山祭』富山大学人文学部文化人類学研究室編『伏木の曳山』富山大学人文学部文化

人類学研究室

米原寛

2020「富山県の山・鈴・屋台行事」射水市教育委員会編『放生津八幡宮祭 曳山行事・築山行事
総合調査報告書』射水市教育委員会